

「賞を得るものはひとりだが……」

上野直蔵

ご卒業おめでとうございます。昔から校長先生などの卒業式の式辞といえば、きまって「卒業」とは、英語では「コメンズメント」と申しまして、という前置きで、「コメンズメント」とは「始めること」であり、諸君は決してこれで業を終えたのではなく、新しく事を始めるわけであります。しかるが故に云々というような型があったようであります。ところが、一方「卒業」は英語で「グラデュエーション」ともいうことはご存知であります。これはラテン語の「グラードス」、「段階」とか「ステップ」とかいう意味から来ております。そうすると、「段階を終えた」ということ、すなわち「ディグリー」をとった（学位をとった）ということになります。しかし、「グラ

ードス」には「歩み」という意味もございますので、卒業式はやはり「歩み」を終えたのではなく、「歩み」の中のひとつの段階終了と考えるべきでしょう。この「コメンスマメント」も「グラデュエーション」も古い言葉で、英語の場合は十三、四世紀頃から使われております。

いずれにしても卒業という慶事は、同時にこれからが大変だ、という正念場だ、という心得があってもいいと思います。

この頃、若い人の間で「おりる」という言葉をよくききます。どうやら、ランプやなにかのゲームの用語の日常語への転用のようであります。勝算なし、とみきわめを早くつけて、決戦に参加しない意志を途中で表明し、そのゲームにはもはや関与しない姿勢です。あとは皆さまよろしく、ときめこむ。これを処世の術に適用して、「もうおりた」と、とり組んでいる仕事を早々にあきらめる。よくいえば、早い機会に先を見透したご明察と申せましょうが、私に言わせれば、人生の本当の明察というのは、これ、と思ったテーマには、執拗にくい下る、決してそのテーマで選ばれた最高位者としての栄冠は望めぬまでも、つかまえて放さない。夷り、という約束があるからそのテーマを選ぶのではなく、そのテーマの内包する大いなる意義のために、いわば一種の高き存在からの召しに応じての仕事であるという自覚のために、邁進する。ここにこそ人生の明察があると思いますし、第一それだからこそ、そのテーマなり、仕事なりがおもしろいのです。勝者は選ばれるのはひとりかもしれない、自分はそれに該当しないかもしれないけれど懸命にがんばる、という姿勢が尊いと思います。

こんな笑咄があります。題して「読みの名人」。場面は将棋の対局です。二人の棋士が向いあいました。駒をふって先手が決まりました。先手の棋士が2六歩と飛車先の歩をつきました。そこで相手は長考に入ったのです。長考に長考を重ねてやがて「参りました」と頭を下げて投了したといのです。相手の手を読み込んで、一手も指さないうちに自分の敗北を読みきったのです。もちろん笑い咄です。しかしこれは、相手や人生のたったひとつの出方で、もうおそろしくなつて戦意を喪失する、要するに「おり」てしまいういぐじのない人間の姿勢を諷したものです。ばかばかしいほどにまで議論をおしすすめていくと、かえつて正しい価値が証明されてしまう諷刺の方法のひとつでしょう。

私はスポーツは柄にもなく好きで、若い頃はよく自分でもたしなみましたが、この年齢になりますと、専ら応援、見物ということで満足しております。ポピュラーなスポーツでは相撲や野球が好きであります。プロ野球にも関心があります。ところがまったくいやになるのは、ひとつの球団がずいぶんと二位以下にゲーム差をひろげてしまつて優勝の行方が誰の目にもあきらかになると、他の球団がとたんに戦意を失なつて残りのゲームをただ消化するためにだけダラダラと行なつてしまふことです。もうこうなると見てもおもしろくない。きたない言葉を使つて恐縮であります。が、ファンを「ナメるな」と言いたいくらいになります。最負のチームすら醜態に見えてくる。大相撲などもそうであります。優勝をあきらめた力士、早くから負けがこんだ力士の戦意喪失を見ていると無性に腹がたちます。幕内の中堅どころのベテラン力士などは、どのみち優勝などは夢のま

た夢。勝ち越すか、たとえ負け越しても十兩陥ちしないといどならいいや、という姿勢が始からあると、大銀杏も、紺のまわしも、ピンと張ったさがりも、すべてうすきたなくみえます。

賞を得る者は、なるほど、ひとりだけです。でもみんなそれをめざしてがんばってほしいのです。なぜなら、それがひとりひとりの神からのお召しであるからです。

「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得るものはひとりだけである。」（『コリント人への第一の手紙』第九章二十四節以下）パウロの言葉であります。かけっこをしても、みんな走るけれど、一等賞はひとりだけだ、というわけです。この「みな走りはするが」というところが大切なのであります。ですからパウロは言葉をつづけて、「あなたがたも賞を得るように走りなさい」と薦めるのです。みんなが賞を得るように走ること。誰ひとり「おり」ないこと。そこにこそ競技の醍醐味がある、とパウロはたとえを出して語っているのです。ではなぜみんな走らなければならないのか。それは「朽ちない冠を得るため」であるからです。私が先程、神からのお召し、と申しあげたのもそういう意味からであります。一度それを飲んだら再び渴かない「永遠の生命に至る水」のためにそうするのであります。だからパウロは自分は卒先者として「目標のはっきりしない走り方をせず」、「自分のからだを打ちたたいて」がんばる、と決然と言いきるのであります。栄冠はたったひとりに与えられるのかもしれませんが、その栄冠をめざして走るために、みんな、ひとりひとりが、はっきりとした目標をもって自分を上げまはげまし、走る、というわけであります。

こう考えますと、我らの校祖新島 襄の、人生の不退転の姿勢を示す折にふれた発言が身にしみてまいります。新島が学校経営の金策と、己れの病に悩まされている頃であります。「世人落膽して、余豈に落膽せざらんや。然れ共余の元氣にかかはりなき、決して落膽せしめず、又死に至るも後悔せしめず……尚泰然として進取の計画を為して止まざらしむる」『新島 襄書簡集』（岩波文庫 二六二頁）と申しておりますが、これは一には「活ける天父の皇天に在（いま）すあり」、二には「愛する生徒の同志社に在るあり。」しかるが故に「軽々に撓屈すべけんや。」（同上書同頁）すなわち、たわんで屈したりしない、と言うのです。ある時には、「戦場よりは一步も退かず」（同上書二一〇頁）、またある時には「進め進め好男児、決して退歩の策を為す勿れ」（同上書二〇〇頁）と単純直載に言いきっております。

さあ、卒業と同時に諸氏は否応なく物心両面での競争社会にふみ出されるわけです。諸君がキリスト教信者であろうとなかろうと、同志社のキリスト教精神をふまえ、至高の存在の意を体して、もっとも純粹なるもの、高く理想的なるものの意義を求めて、力をつくして駆けようではありませんか。そういう己れの求める高きものの意義を身にしみる期間として大学生活があったはずであります。もしそうでなければ、この場において今からでも遅くありません。痛烈に嚙（ほぞ）んでそのまざるりの道を歩みはじめてください。それこそまさに「コメンメント」であります。「おりのな」、軽々と「撓屈」すべからず、であります。

これをもって卒業式の祝辞を終えます。ご静聴を感謝いたします。

（同志社総長）

神からの勇氣

松 山 義 則

イエス・キリストの生涯の最後は十字架上でとされる劇的な場面である。イエスは祭司長らによって捕えられ、総督ポンテオ・ピラトのもとにおくられた。ピラトは祭司長らがイエスをねたみ、罪人にしたであろうとたくらんでいるのを見抜いていた。彼はイエスが無実であることを知っていたのである。しかし煽動された群集は暴徒となつて「十字架につけよ」とせまってきた。ピラトはこの群集を満足させるためにイエスをむち打ったのち、十字架につけるためひきわたした。そして彼は群集の前で水で手を洗つて言つたという。「この人の血について私には責任がない」と。

このピラトの行動は、事態を穩便におさめようとする政治家的感觉によるものであろう。眞実を知りながら、それに従ふことなく、群集の脅しに屈し、手のつけられようもない暴動を恐れてのことであつた。われわれの生活のなかにもピラトと同じ判断にせまられることがある。眞実に従つて

行為することはむずかしい。勇気がなければできないことではない。ピラトは良心のとがめから、自分には関係がないと手を洗ってみせた。しかしこの責任回避は言訳けでしかすぎなかった。

十字架につけられる前に、没薬をませたぶどう酒が出されたがイエスはこれを受けとらなかった。これは死刑囚が十字架上で受ける苦痛をやわらげるための麻醉薬であった。イエスは自分の受けるべき苦悩、死に直面して、正面からこれを勇気をもって受けとめ、これを啜った目で凝視しつつ自己の運命にいどんだのである。このピラトとイエスの行為はまさに対照的である。

私は中学時代、卒業に近くなった最後の時間に担任の先生が別れの言葉として言われたのを鮮明に記憶している。「他人を信じてはいけない」ということであった。他人を信頼すること、互いに愛し互いに信じあうことを当然のこととして心に誓っていた私にとって、この先生の言葉は青天の霹靂であった。他人を信じることに信じないことは矛盾である。しかし、温室育ちの少年たちがこれから荒海に旅立っていくときに、つまずかぬよう人の甘言に乘らぬようという先生の親心であった。信頼することを観念として理解していた単純で柔いだけの少年の心には先生の真意は読みきれなかった。人生は決して甘くない。ものごとを炯炯としたまなざしで冷厳に把握し、蛇のごとく聡く鋭敏でなければならない。烈しい人と人との係わりのなかでは観念だけでは力にはならない。観念だけの、頭で考えただけの、ほのかな感情だけの信頼や愛や、あるいは正義は人間の現実社会のなかでは一溜りもなくふっとんでしまうであろう。先生のこの言葉は一つの処世訓であったかもしれないが、最後に手ばなす教え子達への心からの愛情のあらわれであったと思う。

人間は不思議な存在である。ものを見るとき、ものを考えるとき、混然としてもと同一となつていると同時に、つねにものを見る主体は自己であり、考える主体は自己の考え方の枠組に対象を

はめこんで把握し理解している。他者との混然一体を願ひ対象との同化を経験すると言いながら、そこには主体側の原則が厳然として働いている。ある人はものごとをすべて支配―被支配関係として理解し色づけるかもしれない。またある人は神の摂理として体験するかもしれない。人間はこの考え方や感じ方の枠組からのがれることができないのである。

ピラトもイエスもその枠組の典型を示すものである。ピラトは真実を知る目をもっていたがおよせる外圧になびく方が有利であると判断した。イエスは冷徹な目で自己の死に正面からとりくまれた。私たちにとって大切なことは、自分のものの感じ方、考え方の枠組を練磨し形成する努力であらう。この練磨は人生の現実から逃げない勇氣である。勇氣をもって正面からとりくまねばならない。自分が歩まねばならぬ道を忍耐をもってすすまねばならない。ねばり通すことである。心たけく、たゆむことなく、神の導きたもう道を歩むことである。

勇氣は祈りのなかから生れるであらう。弱い人間が勇氣をもって生きるには、大いなる力の助けがなければならぬ。マルチン・ルターは「神はわがやぐら、わがつよき盾。苦しめるとき、近きたすけぞ」と歌いあげている。イエスが死に直面されたときにも神から与えられた勇氣があった。

卒業生諸君が同志社大学を門出してそれぞれの人生の道を歩まれる。神からの勇氣をもって艱難にとりくんでほしいと思う。艱難をのりこえてこそ人間を真実信頼できる。できるかぎり謙虚で、柔和に、そして寛容を示し、明るく勇氣をもって自己の歩むべき道を歩み通して下さるようお願いします。

(同志社大学長)

二十一世紀を生きる

岡野久二

今春学窓を巣立たれる卒業生みなさんに心から祝意を表します。

今日、私たちは難しい時代に生きています。高度経済成長がオイル・ショックによって足止めされ、諸企業の拡張が抑制されたため、不況の波が押し寄せ、資源を持たないわが国にとっては、今後、政治経済あらゆる面で厳しい試練が続くことが予想されます。現在、政府が計画している行財政改革もその試練に対する手段の模索といえます。すなわち、戦後、急成長を遂げてきた現代社会が、次の新しい時代へ向かって脱皮現象を起こしているのです。時と共に、複雑化し、多様化していく現代社会にあっては、この変革の次にくる時代の様相を予測することは困難であります。が、来るべき二十一世紀を構築していく責任が若いみなさんの双肩に課せられていることだけは間

違いありません。

こんな時代背景の中で、新しい時流に遅れることなく生きていくためには、わが国だけでなく、国際社会に目を向け、常に広い視野を持つことが必要です。資源を持たない、わが国は諸外国との緊密な接触なしには生存し得ない時代になっています。諸外国から「経済アニマル」と非難されながらも、高度の技術と勤勉さで、世界の果てまで進出し、国際競争に活躍している諸企業の努力が今日のわが国の経済を支えているのであります。この傾向は今後更に強まっていくでしょうし、あらゆる面で国際交流は益々盛んになるでしょう。

わが国の鎖国時代に、国禁を犯して函館港から脱出した校祖新島襄の英断は、「此挙敢て君父を捐るに非ず、且つ飲食榮華のためにあらず、全く国家に寸力を竭さんと存じ、中心燃るが如く、遂に此挙に及び候」という、抑制し難い祖国愛によるものでありましたが、この海外雄飛の大望を生み出したのは、未開国日本に較べて、西欧諸国の文明の進歩の素晴らしさに目を向けた新島襄の慧眼でありました。アメリカで学び、ヨーロッパ諸国で見聞を広めた新島は豊かな国際感覚を身につけて帰国しました。同志社創立に当って、キリスト教主義を教育の基本と考えたのも、欧米文明の源泉がキリスト教にあると看破していたからであります。以来、同志社は国際性豊かな人物の養成を志しているのであります。この同志社の国際性が今後の社会において重要な役目を果すものと思います。また、わが国が来るべき二十一世紀に、国際社会において自立するためには国際主義に立脚し、国際的視野をもって行動することが不可決の条件となるでしょう。

次に、物質文明が高度に発達した現代にあつては、あらゆるものが画一化の方向を辿っています。商品の大量生産、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などマス・コミの発達、人間生活を平均化、規格

化し、物質面のみならず精神面まで支配しそんな傾向にあります。最近、若い人たちの無氣力がよく話題になりますが、潤沢な物質と情報過多の生活の中で、自分を見失っている状態が「無氣力」と表現されるのではないのでしょうか。これは、物質的に豊かで、不自由のない生活の中で、自分の生存の意味を自覚できず、内面的、精神的なものを忘れて、即物的、刹那的な事柄へ興味を示すことなのです。この傾向は時代の進歩と共に、更に、助長されて、老若を問わず、人間全般の没個性化が一層強くなるでしょう。

こうした社会にあつては、精神的な強さが重要になり、同時に、強靱な個性が貴重になります。そのためには、社会の画一化、規格化に逆らつて、自分を見失なわないで、自分特有の性格を強く前面に押し出す必要があります。

新島襄は、「我が日本国を經營するには、ゴツイ人物を要する、私は同志社から此のゴツイ人物が出んことを望んで止まぬ」と言っていますが、ゴツイ人物とは、線の太い、個性の強い人物を意味しています。現在、そして未来の社会はこんな人物を渴望しています。

豊かな国際性と強烈な個性をもって、卒業生のみなさんが、わが国のみならず世界各地において、同志社人としての誇りを胸に、堂々と二十一世紀を生き抜かれるよう祈っています。

(同志社女子大学学長)